

モスソガイによるホタテガイ食害試験

兜森 良則

61年漁期、東通村野牛ではモスソガイが好漁であった。現地では肉食性のこの貝が地まき放流ホタテガイを食害しているのではないかと懸念されていたので、食害の有無を明らかにするための簡単な試験を行った。

材 料 と 方 法

供試ホタテガイは平内町浦田で養殖され昭和61年度春季実態調査（浦田の調査日：5月29日）に使われた殻長5～7cmの60年産貝で、試験に供する6月8日までセンター筏に飼育した。モスソガイは平内町小湊で漁獲されたものである。試験は角型FRP水槽（124×66×45cm）に10cm程の厚さに砂を敷きつめ、海水をかけ流しにして行った。このときの水温は15℃であった。

結 果

水槽に20個のモスソガイを入れ砂中潜行を確めた後、7枚のホタテガイを入れて一晚（17時間）経過させたところ、3枚が食害されていた。食害を免がれた残りの4枚のホタテガイは、12日間を経過しても食害されなかった。次に残った4枚のホタテガイのうち、2枚を水道水に10分間浸し、別の2枚は10分間空中露出した後、水槽へ投入した。水槽投入後、30秒を経過して、水道水に浸した2枚は食害され始め、空中露出した2枚は、モスソガイが近づくと殻の開閉運動によって逃避し、その後12日間を経過しても食害されなかった。

考 察

知見によれば、淡水に10分間浸したホタテガイは24時間後に30%、96時間後に70%がへい死するが、10分程度の空中露出ではへい死までいたらないことがわかっている。いずれの方法もホタテガイにとって生命を脅やかす負荷ではあるが、淡水漬けの方がはるかに大きな負荷である。そのため空中露出処理をしたホタテガイは食害を免がれ、淡水漬処理をしたホタテガイは逃避行動さえできなかったのであろう。また何の処理をしなくても食害された3枚のホタテガイは、試験開始前にすでに食害を避けえない程度に弱っていたものと思われる。はたして負荷の程度がどれ位であればモスソガイの食害を受けないのかは今後の課題ではあるが、自力で移動可能な活力を有するホタテガイにあっては特に食害を問題とするほどのものではないと判断される。

参 考 文 献

- 1) 菊田公男他、1974：ホタテガイ幼貝の空中活力試験
- 2) 富永祐二、1974：ホタテガイ稚貝の空中活力試験
- 3) 田中邦三他、1971：ホタテガイ稚貝の蒸留水浸漬時間別生息限界試験